

〈メタ的把握〉 — 〈主観的把握〉の裏を探る— 倭一

本発表の目的は、〈主観的把握〉の裏にある構造を〈メタ的把握〉というモデルで解釈し、それを以て日本語の複数の言語現象の論理を解釈することである。日本語の話し手非言語化文に対して、〈主観的把握〉は非常に簡潔かつ解釈力のある考え方であるが、問題は日本語における実際に話し手が言語化される場合はどうなるかという点である。故に、本発表は試みて〈メタ的把握〉を提出し、〈主観的把握〉は〈メタ的把握〉による演出と主張する。〈メタ的把握〉の認識構図では、“自己”と“世界”（話し手が認知する全てのものの抽象的集合体）という二項対立が成り立ち、“自己”（〈メタ話者〉と呼ぶ）は自らの分身（〈話者〉と呼ぶ）を“世界”の内部へと分裂される。〈メタ的把握〉と〈主観的把握〉の主な違いは、〈主客合一〉は〈メタ話者〉による演出であり、その裏には〈メタ話者〉という安定した認識主体が存在すること、そして、日本語にも〈客観的把握〉のような自己分裂が発生することである。〈メタ的把握〉と〈客観的把握〉の違いは、自己分裂の方向がほぼ逆に近い（前者では“世界”の外部から内部へ自らの分身を分裂させるのに対して、後者は事態の内部に自らの分身を残したまま事態の外部へと分裂する）ということである。本発表は〈メタ的把握〉のモデルを説明する上で、それを以て日本語の話し手の立ち現れ方、事態把握の特徴、「られる」文と授受表現の論理を簡単に論じる。